

## 富山高校物語Ⅲ 苦難を乗り越え、真価を発揮

### 災害の翌々日から授業再開、思いに応えた生徒たち

本校は、昭和46年5月23日(日)夜半に、校舎から出火し、折からの風にあおられて校舎本館が全焼するという大災害に遭遇します。当日は、県の資格試験に貸しており、受験者の煙草火の不始末とされます。

翌日、登校した生徒を集め、延焼をまぬがれた第一体育館で全校集会が行われました。本林校長は、穏やかな口調で、「こんな時こそ、富山高校の真価が発揮できるのだ。落ち着いて勉強してほしい」と生徒を励ましたのです。

「明日から授業再開」と聞き、生徒はどよめきました。校舎本館のほとんどが焼失していたからです。しかし、各クラスが図書館、理科館、体育館、礼法室、食堂など、予想外の場所に割り当てられると、ほっとした笑い声があがりました。こうして、翌日から授業が再開しました。災害規模からみて数日の中断はやむを得ないでしょうが、なぜ、こうしたことができたのでしょうか。

それは、授業再開に向けて、全教職員が、火災発生の夜から不眠不休で取り組んだからです。県教委など各方面からの協力もいただき、千名分の机・椅子、黒板や教材などを、手を尽くして集めたと聞きます。生徒達もこうした熱意に応えようと努力しました。

この間、PTA「むつみ会」や同窓会などからも力強い支援をいただいています。プレハブ校舎が建てられ、夏の厳しい暑さや、冬の寒さに耐えながらも充実した授業がなされました。

懸念されていたその年の進学実績は、例年以上のものとなり、苦難を乗り越える本校の真価を広く知らしめたのです。

火の中から雄々しく蘇る不死鳥のように、本校は苦難を乗り越えて、常に生徒中心に発想してきましたし、これからもこの姿勢を堅持してまいります。



焼失直前の旧校舎と赤松の庭園



焼失した校舎の全景



プレハブ校舎での授業  
暑さ対策の水柱と扇風機

### 進駐軍時代のエピソード 混乱と苦難を越えた富山高校

終戦後、旧制の富山中学から新制富山高校となった昭和23年、全国の高校は占領軍のマクレラン勧告により、小学区制の総合制高校に統合させられました。戦前の教育制度を一気に整理統合しようという意図でした。

本校は、富山南部高校と改称させられ、小学区制によって、本校入学後にも関わらず、多くの生徒が居住地近辺の学校へ転校を強制され、新たに旧高等女学校・工業学校・商業学校・農業学校・薬業学校の生徒が集められ、翌昭和24年からは普通科・商業科の総合制高校とされました。

県内では、神通高校が富山中部高校に、高岡高校と高岡工業高校が高岡中部高校に、高岡商業高校と高岡高校の一部が高岡西部高校に、砺波高校と高岡商業高校の一部が出町高校になど、校名変更・総合制に統合されました。

しかしながら、総合制高校が機能を果たし得ないことから、昭和25年には、富山南部高校は、商業科と家庭科を新設の富山東部高校に移し、普通科高校に戻りました。

昭和28年には、生徒・保護者・同窓生の要望によって校名を富山高等学校に復し、本校は新たな出発点を迎えたのです。